

学級経営(3)

福代昭二

1 はじめに

学級における一斉教授が学校教育の基本形態となったのは18世紀末から19世紀にかけてのことである⁽¹⁾。続いて、多級編制の学級が発達し、19世紀中期以後には、学級の管理や経営についての関心が強まり、その研究や実践も推進された。

わが国が、明治維新の近代化政策の一環として、いち早く着手したのも教育の制度化であり、その画期的な意義を含んでいるのが明治5(1872)年の「学制」(明治5年8月3日文部省布達)である。以後、「小学教則」(明治5年9月8日文部省布達番外)や、「小学校ノ学科及其程度」「明治19年、文部省令」、「学級編制等ニ関スル規則」(明治24年、文部省令)等が出され、その後、大正期にかけて学級概念が明確化されていった。

19世紀以降、欧米先進諸国の学校制度を範として教育の近代化を図ったわが国の教育政策は、初等普通教育の義務制の進展にあった。つまり、近代学校の成立とともに学級が編制され、以後学年別学級編制の多級学校が学校の基本形態となって20世紀に至ったとみることができるのである⁽³⁾。

本来、学級は、学習指導の単位集団として編制されたが、次第に生活集団としての活動を通して生徒指導を行うための単位集団として考えられるようになった。また、この学級集団における学習や生活を通して、成員である児童・生徒は、民主的な資質を学ぶとともに

に、個性を伸長し、自己実現のための態度を身につけることが期待されてきた。このような学級の機能は、学級自体が様々な障害を排除することができるような、望ましい学級においてこそ求め得るものであり、すべての学級に期待できるものではない。それどころか、学級集団が停滞し、混乱したために、その成員のパーソナリティをゆがめることさえある。

われわれは、先に「学級集団と人間関係(1)」「同(2)」「同(3)」において、学級集団の発生、成立条件、成員の相互作用、指導的意義等を考察した⁽³⁾。また、「学級経営(1)」で、わが国の近代教育の推移における先達の学級経営の理論や実践を明確にし⁽⁴⁾、「学級経営(2)」で学級経営の意義、学級経営の「経営的」特性、学級経営の内容、条件、学級経営と教師の今日的課題を明らかにした⁽⁵⁾。本稿では、以上の考察を基盤としながら、学校の中で、閉鎖的・独善的に陥ることなく、そうかといって画一化されることもない学級や学級経営の在り方を探ることを通して学年経営の課題性を明確にしたいと考える。

2 学級経営における学年経営への期待

学級は、一般的に同一年齢の児童・生徒によって編制されている組織であり、また、学校における一定の教育単位として制度的に編成される学校内集団である。

この集団において、児童・生徒の教育・学習の効率を高めるように図る営みが学年・学級経営である。

いうまでもなく、1学年1学級以下という小規模校においては、学年経営即学級経営ということになる。したがって、原則として、同一学年に複数学級が存在する中規模以上の学校において、同一学年の学級間の連絡・調整・統合的な機能を担い、学級経営と学校経営の中間的な単位として、同一学年の担任の教師が、共同で組織的・計画的に学年の教育を運営していくのが学年経営である。この視点によれば、小規模校の場合でも、他学年との関係においては学年経営的な取り組みが必要となり、また、小学校で低学年・中学年・高学年という構想による学年経営的な取り組みが十分考えられるところである。

学校において、一人の教師が、一学級の担任として、学級経営を行い、そのような複数の学級経営を寄せ集めたのが学年経営ではない。一つの学校における、ある学年の中の、ある学級という、その関連を前提とする開かれた学年の経営、学級の経営であってこそ、その教育的成果を望むことができるのである。

従来から、「小学校には、学級経営はあるが、学年経営はない。中学校には、学年経営はあるが、学級経営はない」といわれてきた。これは、小・中学校によって、学年経営や学級経営の内容・性格等に相違があり、児童・生徒の発達や教師の指導理念等に特性のあることを述べたものである。これに加えて、小学校には、とかくエゴの学級経営、中学校には、とかくセクトの学年経営が幅をきかせやすく、ともに学校経営上の支障となりかねないことを戒めた言葉である。また、小・中学校において、開かれた学年・学級経営の在り方を問い直す必要のあることを指摘した言葉として受け止めることが重要である。

小・中学校においては、年々、学年経営が重視されている。これには、必要となった多様な背景や条件が考えられる。例えば、次のどれ一つを取り上げても、学年経営とのかか

わりを考えないで円滑に解決の図れるものはない。⑦量・質ともに多くの時間を費やす教科の指導 ⑧児童・生徒の健全育成、特に問題行動の対応 ⑨適正な進路指導の推進 ⑩学校と家庭の教育上の連携等々。

まさに、変化の激しい社会、情報化社会、科学技術の進歩等に対応する学校教育の体質改善の必要性と連動しているものが学年経営の課題といえる。学校における全教育活動は、教育の構造的変化に対応する新しいシステムが求められ、しかも変化しつつある。この基盤となり、また、推進力の母体となるものとして重視されるのが学年経営である⁽⁶⁾。

〈事例〉

「学年主任兼学級担任の学校経営——学校崩壊から再建をめざして——」（東京都足立区立第15中学校長 塚本 正基⁽⁷⁾）

「○学校崩壊への道をたどる——本校は、教科研究は盛んに行われていたが、道徳、特別活動などの活動は手薄いきらいがあった。このような校内体制は、生徒の心にくい入り魂をゆさぶる情操教育に対する配慮に欠ける結果となった。その場かぎりの管理的な指導が常時行われたため、生徒の心は教師から離れ、父母や地域からの学校に対する温かい心も薄らいでいった。たまたま、卒業生等からの誘いもあって、校内へ悪い動向が持ち込まれてきた。一部生徒による、理由のない遅刻、服装の乱れ、忘れ物の増加、生徒同士のけんか、喫煙、シンナー吸飲、規則無視、授業妨害、教師への暴力等々、問題行動はグループ化して増大し、反面、一般生徒は無気力化の傾向を示した。こうして、教師と生徒の信頼関係で結ばれていた絆は切れかかった。連日、骨身を削り断腸の思いで処理に当たる教師の苦悩は深刻をきわめた。ついに昭和53年1月、過労、気苦勞がもとで前校長は急逝した。」

「○学校再建をめざして——53年2月、この騒然たる真只中に私が校長として着任した。

その後、職員会議等で様々な論議が行われた。最終的には日頃の指導に対する内省という結論となった。教科指導は重視したが、形骸化した道徳、学級の時間、規則中心のみの管理的指導、問題行動生徒に対する黙認、見逃し、生徒理解への手だて不足などが挙げられる。加えて、父母の子どもに対しての養育の変化、地域・父母の教師・学校への不信感等、校内体制の弱体化が露呈し、非行への対処にも学校としての自信を喪失してしまっていた。私どもは、崩壊寸前のこの事態から何とか脱出しなければと懸命になった。私はやはり『原点は学級』と考えた。やがて53年度を迎えた。私は学校経営の方針の中で、何としても学年・学級経営が最大の課題であると考え、全職員に協力要請した。」

「○学年主任の学級担任兼任による再出発——学校運営の立場から、教務、生活等の分掌主任、各学年主任の構成を考える中で、まず何としても、学年・学級経営に重点をかけたかったと考えた。それは原点である学級を、学年主任による学年経営の中で、学級担任の指導に力を入れなくてはならないと思ったからである。そして、当然に学級経営のいかんが勝負を決することなので、学年主任自らも学級担任を兼任してもらうことにした。多忙な学年主任ではあるが、学級担任を兼ね、模範的、先導的役割で奮闘することを期待した。そこで率先垂範する学年主任を先頭に、意図的に強力な学級担任群を配置することで再出発した。……（略）

学級経営が学級担任の個業的な性格から、校長として、学校経営の分節的役割を占める学級経営を特に重視した。『信頼』という目に見えない心の繋がりが切れかかった多くの経験をもつ本校である。この信頼を基盤として、教師と生徒の人間と人間の魂のぶつかり合いの中から、生徒は教師の底知れない愛情に接し、生徒の心が開かれ、そこから相手を信ず

るといふ心が芽生えるものと考えた。」

「○学年主任の指導性と学年経営の重点——生徒の健全育成を図るために、生徒が学級集団から受ける影響が極めて大きい。そこで、学年経営の中で学年主任の指導性を期待し、学級経営の質を向上させるべく配慮した。それは、学年会等の運営が単なる事務的な連絡に終わることなく、常に、そこに課題性をもってあたるよう指導し、その効果は着実に上がってきている。今日の生活指導上の諸問題からみると、特に学級の生徒が互いに向上しようという連帯感を持ち、友達の中から非行に走る者を出さないように、また問題行動を戒め合い忠告し合うように努める雰囲気のできている学級も増えつつある。

各学年の学級指導の重点として、1年では、本校における学校生活の基本を学ぶ意味から、「基本的な生活習慣の徹底」の育成をめざし、集団への適応について指導する。2年では、係活動の指導を通して、自己の能力開発をめざし、子どもの能力を認めて、ほめ、励ますことを考え、指導する。3年では、自己実現への最大の努力をめざす意味から、進路を自ら選択することを学ばせる。

各学年経営の中で、この基本線のもとに、学年会等で、学級の個性を認めながら研究し実践している。また、学年経営では常に意識して1年から2年へ、2年から3年へと積み上げ、積み重ねの指導を考え実践している。1年での基本的な生活習慣の育成から2年の係活動の指導へ、そして、3年では進路の選択をというように積み上げている。」

〈考 察〉

いわゆる「中学校の荒廃」、「校内暴力」等が全国的に頻発したのは、昭和50年代の中期以後である。したがって、足立第15中学校の「学校崩壊から再建をめざして」の事例は同様の問題を持つ学校の先駆的意味を含んでいた。また、「学校崩壊」という用語が示してい

るように、極めて深刻な荒廃現象であった。しかし、反面、校長を中心に、全教職員が一体的、組織的に取り組んで努力すれば、「学校の再建は必ずできる」ということを示した学校ぐるみの実践事例でもある。ゆえに、以後、校内暴力等に苦悩をもつ学校の対応に一種の指南者的な示唆を与えている。その中から学年経営の基本事項を以下に拾ってみる。

- ① 教師の管理的な指導が日常化したとき、生徒の心は教師から離れ、学校も家庭や地域社会からの信頼が薄らぐこととなる。
- ② 教師と生徒の信頼関係の絆が切れたと判断した校長が、学校再建の原点は学級と考え、学校経営の最大の課題に、学年・学級経営を取り上げ、全教師の協力を強く要請した。
- ③ 学年主任が学級担任を兼ねることにより、模範的、先導的、率先垂範の役割に期待し、強力な学級担任群の配置を意図した。
- ④ 校長として、学級経営が学級担任の個業的な性格から、学校の分節的役割を占める学級経営を特に重視した。
- ⑤ 学年経営の中で、学年主任の指導性を期待し、学級経営の質を向上させるよう配慮した。
- ⑥ 各学年の経営において、生徒指導の系統性・発展性を考えて、学級指導(学級活動)を通じて共通的に指導を積み上げていった。

3 学年集団の意義と学年経営機能

一つの学級、同一の学年においても、同じような性格をもつ学級は存在しない。それだけに、学校経営上の課題、特に生徒指導等に関しては、各学級の共同歩調を保つことが強く求められる。このことは、前節の「④」に指摘したように、「校長として、学級経営が学級担任の個業的な性格から、学校の分節的役割を占める学級経営を重視した。」姿勢と相

通ずるものということができる。これを学年レベルで整理して言えば、同学年の学級担任の教師が一体となって、あるいは、一つのチームを組んで、同学年の全児童・生徒の生徒指導に当たろうとする学校経営と考えてよいであろう。

また、これは、生徒の校内暴力等によって教育の正常化が蝕まれた学校において、学校再建を模索する際の、共通的な通路、方途ともいうことができよう。

例えば⁽⁸⁾、どの学級にも学級教師がどのように生徒指導を行っていけばよいかという見通しが、明確に立てえない問題をもつ生徒がいるであろう。特に経験年数の少ない若い教師などにとって、ひとりひとりの力では解決しえない問題をもつ場合も少なくないといわなければならない。また逆に、比較的年齢は若いがカウンセリングに関心をもって勉強しているという教師が学年にいる場合もあるであろう。このような学級担任教師が自分の学級の問題生徒の事例を学年会に提出し、学年の教師たちが事例研究を行っていくことは、直接的にはその生徒のために適切な指導方針を樹立し、生徒指導を協力して進めることになるし、間接的には、各教師の生徒指導のための実力を培う研修にもなるであろう。今日の学校経営においては、このような教師の学年協力体制が不可欠なものとなっているのである。

ところで、学年経営は、教育的機能ばかりでなく、組織的機能の面からいっても効果的な促進が期待される。学年経営は、学校と学級との中間的位置を占めるが、機能的には小集団機能をもっているといえる。この小集団が最も活動しやすいという特質をもつからである⁽⁹⁾。

ここで、学年経営の機能を多面的に列挙して考察してみよう⁽¹⁰⁾。

- ① 学校の教育目標を具現化する機能

学校の教育目標や教育方針等の達成を目指して学年目標を設定する。その目標を具現化するために、学年内の担任の教師で計画をたて、それを各学級に結びつけて実施に努める。

② 教育効果を高める経営的機能

学年経営は、学年主任が中心的な責任者となり、学年内の担任の教師の協働によって推進される。教科をはじめ全教育活動の活性化を目指し、「計画・実施・評価」のサイクルを通じて学年が組織的に教育効果を高める。

③ 教師の共同性、統一性の機能

学年経営は、組織上は学校経営と学級経営との中間的立場にあり、両者の経営の円滑化を図る機能をもっている。学校経営上の学級に対する要請、逆に、学級経営上の学校に対する要請に関して、個々の学級が直接対応すれば学級差が生じる。これの防止には、学年で検討し、協働して対応するという共同性に基づく統一性の機能の発揮が求められる。

④ たての系列と、よこの系列の調整機能

学年経営には、たての系列と、よこの系列の二つの調整機能がある。前者は、学校経営と学級経営の中間としての調整機能であり、後者は、学年内複数の学級経営の中間に働く調整機能である。両者の調和もまた重要である。

⑤ 児童・生徒の健全育成を図る機能

学年経営は、各教師の特性と専門性を効果的に活用し、児童・生徒の一人一人を集中的に理解して、実態に即した指導を推進する。また、学年内教師の共同認識に基づいて、一体的、組織的な生徒指導を行う機能をもつ。

⑥ 学年内教師の研修と心の交流を図る機能

教育の現代化が叫ばれて久しい。多くの学習理論や指導方法の実践も紹介されてい

る。学年内教師は、これらに積極的に対応し、教材研究や授業研究を行って教育の質的向上を図る。また、研修を通じての心の交流が、教師の特性を生かす教授組織の推進に貢献する。

⑦ 学校と家庭の相互理解と協力を図る機能

価値観の多様な現在、学校と家庭の信頼関係を深め、教育上の協力態勢を強化する上で、学年が一体となって果たす役割は大きい。適切な広報活動、懇談会、面接等、木目細かい連携を保ち、相互の教育力を確認しあい、補完的な役割を果たすことが強く求められる。

4 学年経営の組織化

学年経営は、学校経営と学年の個々の学級経営との関連を基礎に運営される。つまり、学校の教育目標や学校の経営目標を目指して学年・学級の児童・生徒の指導・活動を展開するのである。この場合、学年主任は、学年としての共通理解、共同認識を望みながらも学級の特性、独自性を損ねぬよう配慮する。一方、学級担任の教師は、学級の独自性を重視しながらも学年の共通性を尊重する姿勢となって現われる。

そのような学年経営は、児童・生徒の主体性を尊重し、充実した学校生活を送れるような教師活動を積極的に創造する主体となるべきである。従来まではとかく各学級の教育活動を進めるうえでの調整機能が重視されてきたのであるが、単に学級間格差の解消を目指すばかりでなく、学年の適時性に見合った教育活動を構想し推進すべきである。そのためには学年内の意思の統一や協力的性、同一歩調などが重視されるのである⁽¹⁾。

各学校は、学校・学年の教育目標の達成を目指して組織を整え指導力を高める必要がある。これは、学校経営の組織の全体構造の中

で、学年の機能を調和的に生かすことでもある。

学校における校務分掌組織は、一般に、校務を整理・分類して職務の範囲を決め、そのうえに人員を配置する方法がとられている。この場合、分掌する仕事の量の均衡や人員のバランス、適材適所等のことは重視される。しかし、教職員の孤立や非協力を生み出す結果を招きやすい。したがって、いかにして仕事を共同化するかという人的構成にも目を向けることが必要となる¹⁰⁾。

学年の組織、係分掌を決める際には、学年としての分掌職務が、学校全体の活動において、どのような責任体系のもとに推進されていくかをよく理解することが大切である。校務分掌と学年の分掌組織との関係は、学校規模、学年の構成員、男女の比率等によって左右され、一概に決めることはできない。

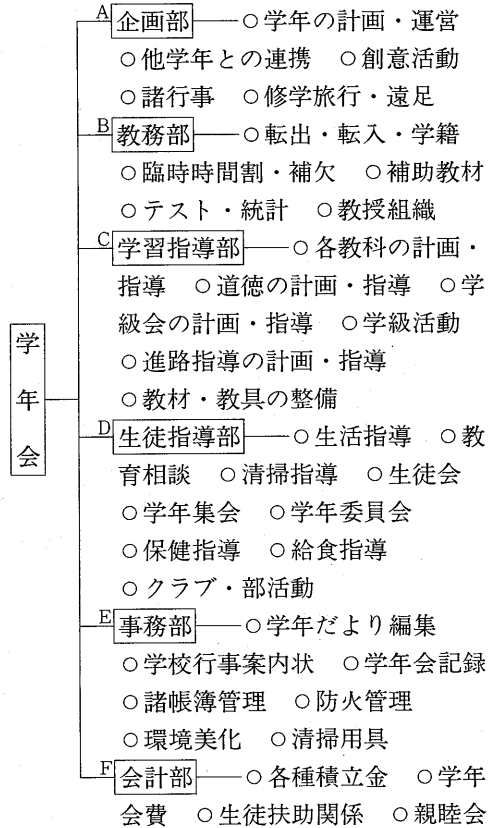
学年の組織は、校務分掌の単なる下請けであってはならない。その一部、あるいは大半が重複する場合もあろう。しかし、学年の分掌組織は、学年主任を中心に、仕事の共同化、組織化を考え、活動しやすい組織となるよう工夫する必要がある。

以上の考察に基づく「学年の分掌組織」を例示したものが表「中学校の例」である。小学校の場合もこれに準じて考えることができる。例示は抽象的であるから、学年の分掌組織を行う上での配慮事項を次に列挙してこれを補うこととしたい。

- ① 学年の教育目標と照らして、職務(係)の内容を具体的に理解する。
- ② 職務には、通年的、季節・学期的、週・日・単発的等、多様なものが含まれているから、量的・質的なバランスを考えて分担するようにする。
- ③ 一人一役的なとらえ方のみではなく、「仕事の共同化」に留意し、教職員の特性が活用できるようにする。

- ④ 職務分担の決定は、教職員個々の能力・適性が発揮でき、希望が生かされるよう学年会で、十分話し合い、共通理解を図る。
- ⑤ 職務分担は、固定的に考えず、火急の場合、特に生徒指導上の必要等が生じた場合、協力し合う態勢を常時から整えておく。

〈表〉 学年分掌組織(中学校の例)



〈注〉

- ① 学年所属12名の場合、各人が複数部の中から3つの職務(係)を分担する。
- ② 学年所属6名の場合、各人が複数部の中から6つの職務(係)を分担する。
- ③ 学年所属3名の場合、各人が複数部の中から12の職務(係)を分担する。
- ④ 学年所属人員により、部の統合、係の統合を工夫する。(例) A・B部を統合して企画部、C・D部を統合して指導部、E・F部を統合して事務部とする。

学年経営の組織化は、学校経営の組織の全体構造の中で、学年の機能を調和的に生かすことであり、そのための学年分担組織について考察してきた。しかし、この組織が教育機能を発揮することができるか否かは、これにかかわる教師、人間の問題と深くかかわっている。このことについて、「中学校学年経営の実際」は、次のように提言している¹³⁾。

これまでの教育現場における校務分掌組織は、責任分担がはっきりしているようではあるが、ただ「なにを、だれが」という方法で人員を配置していく慣行的・形式的な面があり、職員の孤立化と非協力化を生みだしてしまう。むしろ「だれが、だれと、なにを」という人的構成を主に考えた「仕事の共同化」を十分に考慮して組織していかなければならない。したがって、学年の組織、係分担の決定にあたっては、学校・学年の目標達成のためのものであるかどうかをよく吟味するとともに、校務内容の質と量をよく検討し、職員一人一人の特性を考慮して配置していかなければならない。

この提言からも分かるように、学年経営を組織化して機能を高めるには、人的構成と仕事の共同化についての具体的な検討が必要になるであろう。つまり、学年を経営体の機能をもつものと認識して、各担任教師の合意と協力性に基づいて、目標設定、計画作成、実践のサイクルを生かして学年の指導を推進することである。このような、学年共同経営の視点から、次のような主張も見られる¹⁴⁾。

学年共同経営は、各学級の寄り合い集団からは決して生まれえない。学年としての経営機能を持つためには、その学年が目標を設定し、計画し、評価するという働きを、主体的・自律的に行わなければならない。このことが従来の学年経営において必ずしも十分に果たされていないのであったのである。更に、最近言われている発達性あるいは適時性を考慮した教育

のあり方の問題がある。その学年にとって最もふさわしい教育活動こそが有効であるとする考えは、学年を中心とする教育のあり方の見直しを迫っており、そこに新しい教育課題があるといえるのである。また、学年共同経営を推進するものとして、教授組織の改善を含めた学年組織の変質の問題がある。今日の教育は、一人の学級担任ではとうていこなし得ないほどの複雑さや多様化がみられ、それが教師相互の協力性を要求している。学年組織が新しい教育課題にいかに対応できるかが問われているのである。

5 学年経営の推進

(1) 学年会の組織と役割

学年経営を効果的に運営するためには、その連絡・調整・協議の場が必要であり、これに相当するのが学年会である。換言すれば、学年会は学年経営を推進する主体である。

いずれの学校においても、1学年に2学級以上の学級があれば、学級間の事務連絡、授業の進度調節、行事の打ち合わせ、教師の懇親等の必要が生じる。これらのねらいを満たすための話し合い、会合的な意味をもつ学年会は、学校教育の中に定着してきている。そして、学年経営という言葉が脚光を浴びる以前から、学年会自体が学年経営的な役割を担ってきた。

つまり、学年会は、学校（長）の方針や計画の伝達、教科指導の進度や行事の調整・連絡、施設の使用の打ち合わせ等、伝統的に担ってきた役割と、学年経営の機能を果たすための集団的計画決定や組織の実施、集団評価の場としての役割を果たすことが求められている。

この学年会の組織・内容を踏まえ、学年会の運営の役割を次のように整理することができる¹⁵⁾。

- ① 学校の教育目標、年度の重点や方針等を学年の教育に効率的に具現化する。
- ② 学年の教育目標の設置と、具現化・実践化の方策を立てて努力する。
- ③ 学年の年間計画の協議決定と、学年の分担組織を関連づけて実践に努める。
- ④ 学級の独自性と学年の同一步調を尊重し、共同認識を基盤として学年経営を推進する。
- ⑤ 生徒指導、学習指導の協力体制を図るとともに、教師の研究・研修の機会にする。
- ⑥ 児童・生徒に即した教材・教具の開発・活用及び共同管理に努力する。
- ⑦ 他学年との連絡・調整、円滑な協力関係に努める。
- ⑧ 職員会、学年主任会等、全校的な諸会議にそなえ、学年の考えや提案事項を協議する。
- ⑨ 学年関係教師の相互理解を図り、人間関係を深めて、親睦、特性の活用に努める。
- ⑩ 多様な家庭との連携について、内容・方法の共通化を図り、効率化に努める。

(2) 学年主任の設置と認務

同一学年に複数の学級をもつ学校においては、学級のとりまとめや連絡調整をする役として、従来から学年主任がおかれていた。近年、教育の現代化、教育機器の発達、教授法の変革等に伴って、学年関係教師の組織的な取り組みが求められるようになった。この際学年主任は、その学年経営の要としての重要性が注目されるようになった。しかし、各学校の規模や組織は多様であり、学年主任の実態も複雑で、その役割、機能も一定していないのが一般的な状態であった。

昭和40年代後半から、「調和のとれた学校運営」をめざし、教職活動の秩序維持と、効率化を高めるために「学校主任」の位置づけを明確にする、「主任の制度化」の動きが校長・行政等から出てきた。昭和50年12月26日、「学校教育法施行規則の一部を改正する省令」

(文部省令第41号)が公布され、昭和57年3月1日から施行された。この「学校主任制」の一環として、学年主任の制度化が行われた。そして、学年主任は、学校規模によるが、小・中・高等学校のいずれにもおかれることとなった。

学年主任の役割は、「校長の監督を受け、当該学年の教育活動に関する事項について、連絡調整及び指導、助言に当たる」(学校教育法施行規則第22条の3)と規定されている。なお「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の施行について」(通達)の職務規定には、「学年主任は、校長の監督を受け、学年の経営方針の設定、学年行事の計画・実施等当該学年の学級担任及び他の学年主任、教務主任、生徒指導主事等との連絡調整に当たるとともに、当該学年の学級担任に対する指導助言に当たるものであること」と示されている。しかし、具体的な職務内容は必ずしも明確ではない。これは他から与えられるものではなく、学校・学年組織における学年主任の位置、構成員との関連等を考慮して、それぞれの学校の実態に即したものを創造する必要がある。その際、手がかりとなる学年主任の職務内容の基本は次のように整理することができる¹⁰⁾。

- ① 学校経営を担い、校長・教頭を補佐する
学年経営は学校経営の一環であることを認識し、校長・教頭と十分連絡をとり、円滑な運営を図る。一方、学年会のリーダーとして、学年会の教師の意向を尊重し、学校経営に反映するよう努める。
- ② 学年経営の推進力としての責任を果たす
学年経営の計画—実施—評価のマネジメント・サイクルに直接の責任を負う。学年会や保護者等の企画、議案の調整・運営、学年・学級事務等の総括・推進に努める。
- ③ 他学年・他部との連絡調整を図る。
学年主任会、学年運営委員会等を通じて

他学年との連携、校務分掌上の他部との連絡調整を図る。関係事項を学年会に報告し学年経営の円滑化に努める。

④ 関係教師のモラルの向上を図る。

学年会の決定事項に対し、教師が連帯して意欲をもって取り組めるようにする。

⑤ 学年教師の相談、指導・助言にあたる。

年齢・性別・教職経験等の多様な教師の持ち味、機能、適性が学級経営・学年経営に生かせるよう相談、指導、助言する。特に切磋琢磨しあう雰囲気醸成に努める。

また、学年主任が直接かかわりをもつ「学年の教育活動に関する事項」は、基本的に以下のものが考えられる¹⁰⁾。

- ① 学年（学級）経営案の作成と改善
- ② 学年の年間・学期・月間の計画・運営
- ③ 日課表の作成・変更・予告
- ④ 学年・学級の生徒指導の計画と運営
- ⑤ 週授業案の作成、進度の調整
- ⑥ 校外授業の計画・連絡・届出
- ⑦ 学校・学年・学級行事の計画と運営
- ⑧ 生徒指導要録・通知票等に関する事務
- ⑨ 補助教材等の選定・活用
- ⑩ 各種検査・調査等の実施と保護
- ⑪ 校内諸委員会への参加と連絡・調整
- ⑫ 学年・学級父母会の企画・運営
- ⑬ 学年通信の企画・発行

学年経営を推進する上での二大支柱ともいえる学年会と学年主任の問題を考察してきた。学年経営は学校経営と学級経営の中間にあって、学校経営の方針や経営過程における諸問題を学年で討議して解決し、あるいは共通理解を深め、必要に応じては学級で実践に移す。また、学級や学年の問題の解決を図るとともに、全校的理解が必要なものに関しては、学校経営にその意図を反映させる。この意味において、学年経営は、学校経営と学級経営の中間にあって循環器的機能を果たす重要な役割をもっている。この学年経営が円滑、能率

的に進められるために、学年会が存在するし、その果たす機能は極めて大きいといえる。

一方、学年主任に関しては、主任そのものは制度化される以前から学校に置かれていた。しかし、その職務が慣習的なものであり、その主任の人間性、持ち味に期待する点が少なくなかった。ところが、今日の学校は、様々な社会的・教育的課題を受けて、複雑な組織体になってきている。そのため、経営の民主化、合理化が求められ、専門分化あるいは職能の分化が進みつつある。このような流れに位置づけられたものが、学校における主任の制度化といえる。したがって、学年主任には、企画力、実践力、指導力、公平さ、人間性などの特質を発揮し、創造的で民主的な構成員の参画を主体にした学年経営を実現することが責務であると考えられる。

6 おわりに

近代の学校は、主として学級を単位として教育が推進された。学級経営の研究・実践も近代学校の発生とともに始められ発展してきたと考えることができる。ところが、今日の学校教育にかかわる内外の諸条件や課題は複雑となり、微妙となっている。そのことは、学級経営のもつ教育的意義にもあてはまることである。

われわれは、学級集団が学習集団であるとともに生活集団であるという二重の意義をもつことに着目した。そして、「学級集団と人間関係(1)(2)(3)」及び「学級経営(1)(2)」において、諸問題を整理しながら考察してきた。その結果、学校そのものの性格が、知識・技術等を児童・生徒に注入する、いわゆる教科中心の教育から、人間としての全面的発達を図る教育へ脱皮していくにつれて、学級集団に対する期待が膨らむことも明らかにした。特に戦後の教育において、民主的な社会の成員

としての資質の育成が求められ、集団における経験が重視されるようになった。これに加えて、人格形成に深く関連する集団（社会）の機能が社会学や社会心理学等の研究の進展があって、学級集団の育成や指導が推進された経緯も追ってみた。

この中から、新たな問題に目を向ける必要に駆られたのである。それは、学級における児童・生徒の指導や活動、つまり、学級経営において、学級担任の教師を中心にして、学級を重視し、学級を守り、学級の教育機能を高めることは、閉鎖的であってはならないことである。換言すれば、学級担任の教師が、学級の枠をゆるめ、同学年の学級を担任する学級担任の教師が連携協力し、一つのチームを組んで、同学年のすべての児童・生徒の指導に当たることの必要性である。

このような教師の学年協力体制は、学年経営の課題であるが、同時に、学校経営や学級経営にもかかわる問題でもある。それは、教師自身が三重的なかかわりの中で、それをどのように調和と統一を図るかの課題でもある。

本稿においては、学級経営における学年経営への期待、学年経営の組織化、学年経営の推進等を明らかにした。

言うまでもなく、学年経営を適切に進めることは、学級経営、学校経営をより活性化することに通ずるものでなくてはならない。この点に関しては今後も一層考察を続けていきたいと考えている。

〈注〉

- (1) 福代昭二「学級集団と人間関係(1)」(文教大学女子短期大学部研究紀要 第30集) 1986年 P.12
- (2) 同上 P.13
- (3) 福代昭二「学級集団と人間関係(1)」「同(2)」「同(3)」(文教大学女子短期大学部研究紀要 第30, 31, 32集) 1986, 87, 88年
- (4) 福代昭二「学級経営(1)」(文教大学女子短期大学部研究紀要 第33集) 1989年

- (5) 福代昭二「学級経営(2)」(文教大学女子短期大学部研究紀要 第34集) 1990年
- (6) 同上「学年経営の意義と機能」(雑誌 悠) ぎょうせい 1987年 4月号 P.80
- (7) 塚本正基「体験の実践論—こうして『学級』を変えた③」(雑誌 総合教育技術) 小学館 1982年 5月号 PP.54~55
- (8) 宇留田敬一「学級集団の編成」(現代学校経営講座2) 第一法規 1976年 P.20
- (9) 高階玲治「学年経営の意義」(吉本・真野・宇留田編 新教育を創造する学校経営⑥) 東京書籍 1980年 P.47
- (10) 前掲(6) P.81
- (11) 高階玲治「学年経営の組織化」(吉岡・永岡編 現代学校教育全書9) ぎょうせい 1979年 P.49
- (12) 福代昭二「学年経営の組織(1)」(雑誌 悠) ぎょうせい 1987年 6月号 PP.72~73
- (13) 高橋・渡辺・大石編「中学校学年経営の実際」 文教書院 1985年 P.22
- (14) 前掲(11) P.57
- (15) 福代昭二「学年経営の組織(2)」(雑誌 悠) ぎょうせい 1987年 7月号 PP.72~73
- (16) 同上 P.73
- (17) 福代昭二「校内組織の確立と学級の活性化」(木川達爾編著 人間性教育と学校経営 下) 第一法規 1990年 P.70